

短歌（投稿順）

「じゃあまたね」送り火済ませ子等帰る孫の成長時には寂し
白き日の灼くる宮島ひそまりて宝物殿の太刀の刃の冷ゆ
想像は及びもつかず荒川の甌穴つくりし太古の流れ
役所より派遣が決まり孫は発つ熊本地震被災地支援に
震度七熊本襲う災害の悲惨映像涙に曇る
混迷の世界と気象変動と行く末案じ怖さ募る日
櫓の上一家総出で音頭とり亡き師の指導姉から我が子へ
ピザや前主人待つとかや犬二匹地面にゴロリ無造作なりて
日中の暑さを避けて夕方に草刈る手足蚊に刺さる
遠き日の赴任地である千葉豪雨予想上廻るあまりの悲惨
師走入り「車はやつと直ったよ」言へばウーさん「よかったデスネ」
便利なる都会住んでる人達も地震大雨酷暑の被害
頼る人いずに上達した仕事誰にも負けぬ逸品つくる
コラシヨっと合いの手入れるうちの孫楽しみなあ櫓の上で

下田野 新井 節子
皆野 太幡琉美花
皆野 萩原 初恵
皆野 引間 万亀
下田野沢 浅見 豊子
皆野 根岸 詩子
皆野 大澤 貴夫
国神 藤原マキ子
三沢 新井 叶子
三沢 新井 民子
皆野 打木 昭廣
上田野沢 四方田利男
皆野 林田 凛太
皆野 駒形の縄文人

俳句 根岸茉莉 選 投稿数 17 句

御詠歌の鈴の音やみて蟬の声 国神 鈴木 正文
(詩)寺から聞こえてくる仏を讃える御詠歌の鈴の音。作者は近くの山畑で作業をしながら心穏やかに聞いていたのでしょう。唱え終わって鈴の音が止むと急に蟬の鳴き声が大きく響きました。静かな祈りの音から自然界の生命力溢れる音への移り変わりの一瞬を見事に捉えた良句です。二句目、山口県湯田は中原中也の生地。墓には太陽が照りつけ風も全くなく人声もなし。蟬だけが異様に鳴いている。鳴き狂うという強い表現に孤独や悲しみ激情など中也の心が見えるような気がして詩を読み返したくなりましう。三句目、夏の暑さも和らぎ風も心地よい荒川。輝きながら水を切る小石。子供たちののはしゃぎ声。新涼の季語がびつたり爽やかな句です。

風死なば蟬鳴き狂う中也墓 孫と行く音頭祭り夏の宵
皆野 太幡琉美花 皆野 駒形の縄文人
新涼や水切りの子ら荒川に 皆野 島 弘
法師ゼミふともの悲し昼下り 皆野 萩原 初恵
庭隅の著我に縋りし蟬の殻 国神 久米雄志郎
風微か靡き艶へる萋の花 皆野 引間 千鶴
白駒の水面に光る夏の雲 下田野沢 浅見 豊子
秋茄子の彩を愛でつつ昼厨 皆野 櫻井 早苗
三沢 新井 民子
寺山を下る朝霧今日は晴 兜虫見守る孫の徒競走
国神 土屋 良彦 皆野 花垣好比古